

起

筆

能村 研三

千葉で輝く

先師登四郎は千葉県俳壇には積極的に参加することは余りなかったが、私の時代になってからは県単位、市単位の協会を通じて私を含めて「沖」同人が役員を務めることが多く、それぞれの会の運営にも積極的に携わっている。

その一つの千葉県俳句作家協会が制定している「千葉県俳句大賞」も今回で第十一回となり、千葉県が誇るその年の句集に贈られる賞である。昨年、大賞は広渡敬雄さん、準賞は峰崎成規さんが受賞した。今年の俳句大賞は、栗坪和子さんの句集『海嘯』が、準賞は栗原公子さんの『折り鶴』がそれぞれ受賞し、二年連続のダブル受賞という快挙を成し遂げた。

海嘯の遠鳴るころや鯨来る 和子
折り鶴を開けば四角ひろしま忌 公子
同賞の授賞式は五月の俳句協会の総会で行われる予定である。

市川市では二〇〇〇年のミレニアム事業の一つとして始まった「手児奈文学賞」（市川を詠む）が今回で二十六回を迎え、今年も市川市の魅力を様々な角度からとらえ市外から

も多くの投稿があった。こちらの俳句部門では、平松うさぎさんが大賞を受賞した。

行徳担ぎ神輿に街の揉まれけり うさぎ
平松さんは東京にお住まいの方だが、行徳ふれあい館を訪ねての作である。

また船橋市文学賞は昭和六十三年に設立され、今回で三十八回目を迎えたが、こちらの俳句部門は登四郎が第一回からしばらく選者を務めた。今回の大賞には本年「沖」新人賞に輝いた清水陽子さんが受賞された。

清水陽子さんは「大神宮」というタイトルで、船橋市民の心のよりどころでもある「意富比神社」、通称「船橋大神宮」の四季を通じて三十句をまとめたものである。

かなかなや川のかたちに風は浴ひ 陽子
この他にも上田玲子さんと小泉芝雲さんが船橋市広報年間賞を市長から授与されたり、塩野谷慎吾さんが千葉日報の年間最優秀賞を受賞するなど千葉で輝いてくれる同人が多くいることを嬉しく思っている。

能村 研三

声 乗 せ て 起 筆 の 一 字 筆 始 め
意 に す こ し 外 れ て 割 れ し 鏡 餅
風 に 髪 逆 立 て て を り 恵 方 拝
福 達 磨 たり し も 今 は どん ど 火 に
古 壺 の 真 贋 を 問 ふ 小 年 越
流 木 の う し ほ や つ れ も 初 昔